

— 連載 —

美術館のある風景 (第13回)

展覧会のなりたち〈その六〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



ヴァロトン展入り口（中庭口）

ここまで書いてきたのですから、「ヴァロトン展—冷たい炎の画家」のその後を簡単にレポートします。

6月14日の展覧会一般公開後は、やはり予想通り、というかそれを上回る反響が各方面からありました。さまざまな雑誌が「ヴァロトンってどういう画家ですか？」といった初歩的なものから、宣伝も交えたタイアップ記事、シリアスなレポートまでそれぞれ色々なレベルで記事を書いてくれました。また、各新聞の文化欄にもこぞって専門的に掘り下げた紹介記事が掲載されました（その中にはこの『資本市場』6月号にも執筆されている高階秀爾大原美術館館長の文章もありました）。そして、「日曜美術館」（NHK）、「ぶらぶら美術・博物館」（BS日テレ）、「世界の名画」（BS朝日）、「美の巨人たち」（テレビ東京）など、テレビ・メディアの美術番組が揃って同じ美術展を取り上げることなどなかなか無いのですが、今回はそれが実現しました。本当に有難いことでした。

展覧会ホームページには作家の角田光代さんが素晴らしい短編を寄稿してくれ、美術館の外でも、日本美術史家の山下裕二さん、エッセイストの辛酸なめ子さん、作家の島田雅彦さん、映画批評家の滝本誠さん、造形作家の東芋さんといった異色の顔ぶれの「ヴァロトン応援団」による連続トークが催され、展覧会を盛り上げてくれました。そしてそれらに刺激されるように、通常の三菱一号館美術館のファン層とも少々異なる、若い世代を中心にした多彩な鑑賞者が展覧会を訪れてくれ

ました。その意味では、これまで丸の内という場所に多少縁遠かった、新しい美術館ファン層を開拓することができたのかもしれない。

しかし、それもこれも、ヴァロトンという作家が現代にもそのまま通じる斬新な造形力と批評精神を持っていたからに他なりません。私は、会期中ずっと来館者たちが発するツイッターやブログを閲覧していましたが、この殆ど未紹介の画家がもつ新鮮な力に人々が圧倒されている様子が見事に伝わってきました。謎に包まれたような油彩画群と同時に、当館が所蔵する版画作品のシリーズにも観覧者たちが魅了されていることも分かり、「ヴァロトン・コレクションを持っていて良かった」と心から思いもしました。

ただ、こうしたメディアや口コミによる高評価とは裏腹に、最初はなかなか客足が伸びずやきもきさせられたのも事実です。ヴァロトンのような未知の美術家を扱う場合、我々のような宣伝予算規模の美術館では、必ずしもマネージメント的成功を導けるわけではないことは分かっていますが、やはりなるべくそうあって欲しいと願うのは主催者の心情です。でも8月に入ると口コミの評判がじわじわと伝わったのか、どんどんと来館者が増えていきました。そしてこの記事を書いている9月16日の時点で既に10万人近くの入場者を数え、お陰さまで最初の想定目標を上回ることができました。あと一週間余りでいったいどれだけの方に見ただけなのか、気になるところです。